四旬節第４主日　ヨハネ９：１、６～９、13～17、34～38

長い９章を省略して朗読されました。今日の福音は３つのシーンで成り立っています。癒しの場面、ファリサイ派と癒された人の会話、癒された人とイエス様の対話です。

最初の場面です。イエス様は、生まれつき目の見えない人を探して自分から近づきます。生まれた時から目が見えないということは、どうすることもできない人間の絶望の響きがあります。当時は物乞いをするしかありませんでした。何十年でしょうか？　不自由な体で生きながらえてきました。たくさんの病人の中から、まずその人を見つけてイエス様の方からイニシアティブをとって近づきます。「イエスは唾を吐き、泥をこねてその人の目に塗る」　あわれみを込めたイエス様の行動が想像できます。でも、それですぐに目が見えるようになる訳ではありません。エルサレムで共同で使っていたと思われる大きな用水路シロアムにまで行って、目を洗うように指示します。盲人が一人で、シロアムの池まで行く道のりは容易なことではなかったでしょう。その孤独な歩みが癒しを準備しています。イエス様の働きかけ（イニシアティブ)、その恵みに与る人の行動、二つが合わさって初めて神様が働かれます。癒された人は、別人と思われるほどに生き生きとしてきます。

第二のシーンは、ファリサイ派と癒された人との対話です。ファリサイ派の人たちは、「安息日を守らないのは罪人」だと決めかかっています。でも、罪人のイエスが神の業(癒しの業)を行ったので当惑しています。「本当にイエスが癒したのか？」と疑い、「どのように癒したのか？」としつこく問い正します。癒された人はありのままに説明します。けれども、ファリサイ派の人たちはイエスのわざを受け入れられません。彼の両親まで呼んで確かめます。ファリサイ派は、生まれつき盲人で物乞いをしていた教養のない人に理屈で押さえつけようとします。真実をねじ伏せようとします。癒された人は、神の恵みを受けた体験をストレートに語ります。盲人だった人の真実の言葉が、立場を守ろうとするファリサイ派の思いを打ち砕きます。

第三のシーンで、癒された人はイエス様と決定的に出会います。メンツにこだわるファリサイ派との間で板挟みになる苦しいプロセスを経たからこそ、彼は救いに与かります。二人の対話をじっくり味わいましょう。

「あなたは人の子を信じるか」

「主よ、その方はどんな人ですか？　その方を信じたいのですが」

「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのがその人だ」

「主よ、信じます。」と言ってひざまずいた。

癒された盲人は「ひざまずいて」感謝の気持ちを表します。素晴らしい信仰告白です。

さて、ヨハネ福音書は、「イエスが来られることで、すでに裁きになっている」と言います。日本語で「裁き」と訳されているギリシア語の「クリシス」には、「区別する」「振り分ける」意味があります。イエス様の癒しを、そのまま受け取る人（盲人）と、理屈をこねて歪める人（ファリサイ派）とに「選り分け」られます。

私たちは、ファリサイ派のように心を頑なにする人ではなく、真実に目が開かれた人（盲人）になるように、願いましょう。